

北海道のコモチカナヘビが帰化分布とは？

竹中 踐

005-8601 札幌市南区南沢5-1-1 北海道東海大学工学部

Is the distribution of the viviparous lizard in Hokkaido naturalized?

By Sen Takenaka

School of engineering, Hokkaido Tokai University, Minamisawa 5-1-1, Minami-ku, Sapporo 005-8601 Japan

国内においてコモチカナヘビ (*Lacerta vivipara*) は、北海道のサロベツ原野で1961年に確認され(犬飼他, 1967), ほかに稚内市, 猿払村, 浜頓別町といった北海道北部での生息分布が知られる(小田島, 1982; 小栗, 1983; Takenaka, 1991). これらの分布地について, 特に人為的な移動, 移入といった情報は得られていない. また, 最初の確認地のサロベツ原野についても特に移入の情報が得られていないことから, 自然分布と考えられている. コモチカナヘビは, 国外ではヨーロッパからロシアの東部, サハリンなどにいたるまで, 広大な分布域をもつ. ヨーロッパ内ではいくつかの分岐分化集団が推定されているが, 分布域の広い範囲を占めるロシアでは比較的分子遺伝学的変異は少なく, 予備的なミトクローム b 遺伝子の分析では北海道の集団もロシアの集団に見られるものと同じである (Surget-Groba et al. 2001; Heullin, 私信). 要するに, 北海道に分布する本種集団に関しては自然分布か移入かを決定付ける証拠は得られていない. しかしながら, 日本の自然分布とされる生物種のほとんどについては同様の解明状況であるので, 特に人為分布を疑ってかかる理由はないというのが現時点での本種の取り扱いであろう.

ところが, 最近出版された「Naturalized

Reptiles and Amphibians of the World」の中で, コモチカナヘビの日本の分布が帰化分布とされた (Lever, 2003). この本は, 世界のどこかで帰化分布が記録されている爬虫・両生類の各種について, その自然分布域と帰化分布域を若干の説明とともに列挙するといった内容からなる. コモチカナヘビについては帰化分布域 (Naturalized distribution) として, アジアの日本があげられている. 正確を期すために Lever (2003) の該当部分を原文のまま引用する.

「In 1961 the viviparous lizard was discovered in Sarobetu Plain (Sarobetu Genya) on the northern Japanese island of Hokkaido; in 1983 a single individual was found in the east Sarobetu by the Okhotsk Sea (Ohotoku Kai); this could either represent an extension of the species' range or a new introduction (Hara 1986).」《筆者訳: 1961年に日本の北海道のサロベツ原野でコモチカナヘビが発見された. そして, 1983年にサロベツの東, オホーツク海側で1個体が見つかった. これは種の分布域拡大か新たな移入かを示すのであろう (原, 1986).》

ここに示されている発見時あるいは第二の分布地発見については原著の引用がないことから, 記載の知見は, 原 (1986) の記述のみによっていると考えられる. 引用の英文

タイトルは *Kika Hachuurui (The Naturalized Reptiles of Japan)* と、そのままのローマ字筆記と英訳を列記しているので間接的な引用ではなさそうである。

原 (1986) は当時の日本において、帰化爬虫類についてまとめられたものがないことから、その紹介を行った。はっきり帰化動物といえるものとしてミシシッピアカミミガメとアノールトカゲをあげている。それら2種について、当時の知見および著者の調査記録を2つの項目として詳細に述べている。アノールトカゲについては、Lever (2003) もその内容を引用しているが、ミシシッピアカミミガメについては上野不忍池で1965年から見かけるようになったと具体的記述があるにもかかわらず引用しておらず、1972年頃からの別の記録を引用している。原 (1986) は3番目の項目として「他の帰化(?) 爬虫類」と題していくつかの爬虫類について言及している。その中で、ミナミイシガメ、オガサワラヒメヤモリ (現在の和名でオガサワラヤモリ)、ホオグロヤモリ、ブラミニメクラヘビとコモチカナヘビの名があがっている。ミナミイシガメについては、京都周辺と悪石島のものは人為的なものといわれてきたが、先島諸島のものとは違うようで東南アジアのどこからか持ち込まれたのではと述べている。オガサワラヒメヤモリについては国内帰化、再帰化など南西列島との関係が複雑であることを述べている。また、ホオグロヤモリとブラミニメクラヘビについてはデータ不足で著者の手にはおえないと述べている。

コモチカナヘビについては、正確を期すために原 (1983) の該当部分を原文のまま引用することにする (ただし、原著では引用文献は文中で番号表示となっている)。

「コモチカナヘビ *Lacerta vivipara* (カナヘビ科) はヨーロッパからサハリンまでいる。北海道のサロベツ原野にいたことがわかったのは1961年のことである (犬飼他, 1967)。

昔から北海道にいたのか、持ち込まれたのかまるではわからない。1983年にはサロベツの東のオホーツク海側で採集された (小栗, 1983)。持ち込まれ、サロベツでひっそりしていたものが時を得て分布を拡げだしたのだろうか。」(注釈: 引用文献の「犬飼他, 1967」は原著では「北海道開発局, 1967」と表示されている。)

この記述と前述の Lever (2003) の記述を比較すればわかるように、原 (1983) が Lever (2003) の記載のもとになっているのはあきらかである。ただし、「昔から北海道にいたのか、持ち込まれたのかまるではわからない」という部分が切り落とされ、第二の発見の記述の表現が若干違っている。

原 (1983) の記述は慎重であり、あらたな生息分布発見が記録された場合に、そのようにいろいろな可能性を考えてみるということは当然であろう。また、日本語によくあることであるが、含みを残す表現もあるが、特にあいまいな記述にはなっていない。すくなくとも「昔から北海道にいたのか、持ち込まれたのかまるではわからない」という表現は「わからない」ということが明確に示されているのである。にもかかわらず、Lever (2003) がこれをもとに帰化分布と判断したのであれば、不適切といわざるを得ない。

引用文献

- 原 幸治. 1983. 帰化爬虫類. 遺伝 40 (1): 14-17.
- 犬飼哲夫・太田嘉四夫・阿部 永・小林恒明. 1967. 陸上動物. p. 199-231. サロベツ総合調査報告書—サロベツ地域開発着手時の実態. 北海道開発局
- Lever, C. 2003. *Naturalized Reptiles and Amphibians of the World*. Oxford Univ. Press, New York. 318 pp.
- 小田島護. 1982. 北海道の野生動物. 北海道新聞社, 札幌. 246 pp.
- 小栗 宏. 1983. コモチカナヘビ新地域で発見. 動物と自然 13 (14): 28-29.

Surget-Groba, Y., B. Heulin, C. Guillaume, R. S. Thorpe, L. Kupriyanova, N. Vogrin, R. Maslak, S. Mazzotti, M. Venczel, I. Ghira, G. Odierna, O. Leontyeva, J. C. Monney and N. Smith. 2001. Intraspecific phylogeography of *Lacerta vivipara* and the evolution

of viviparity. *Molecular Phylogenetics and Evolution* 18: 449–459.

Takenaka S. 1991. A note on the reproduction of the lizard *Lacerta vivipara* in Hokkaido, Japan. *Japanese J. Herpetol.* 14: 79–80.

沖永良部島のアオカナヘビについて

竹中 踐

005-8601 札幌市南区南沢5-1-1 北海道東海大学工学部

On the grass lizard, *Takydromus smaragdinus* in the Okino-erabu Island

By Sen Takenaka

School of engineering, Hokkaido Tokai University, Minamisawa 5-1-1, Minami-ku, Sapporo 005-8601 Japan

2000年3月29日から3月31日にかけて鹿児島県の沖永良部島(和泊町, 知名町)においてアオカナヘビ(*Takydromus smaragdinus*)の生息調査およびそれに関する聞き取り調査を行った。アオカナヘビについての聞き取りは写真を示して行った。天候は3日間とも晴れであった。

3月29日は和の周辺および丘の上にあるテレビ塔までを徒歩で調査した。両生爬虫類の目撃はなかった。畑作業中の高齢女性2人からの聞き取りではトカゲ類は周辺に生息せず、緑色のトカゲは昔から見たことがないとのことであった。

3月30日からは自動車を使用し各地を調査した。30日の午前中は昇竜洞と大山周辺を調査した。大山の丘陵上部に植物園があり、樹林および草地も多く存在したが爬虫類は見られなかった。大山植物園のみどり推進課(知名町)職員とその事務所を訪れた道路作業員の話では、写真を見て「これ(アオカナヘビ)はいることはいる」とのことで、「草の上において、昔は石垣のまわりによくいたが、少なくなった」とのことであった。午前11時に隣

接した保安林の池においてウシガエル(*Rana catesbeiana*)の成体3個体を目撃した。その他の両生爬虫類の目撃は得られなかった。付近の畑作地間の路上でイタチの轢死体1例を目撃した。畑作業中の男性に写真を見せて聞き取りしたところでは緑色のトカゲはいないとのことであった。

調査途中で役場の経済課において農薬散布と移入動物について聞き取りを行った。「サトウキビに対する農薬散布は20年以上前に1回試験的に行っただけである。」「山林への農薬散布は大山の山腹を周回する道路より上部およびその他の山の上部に対して行われる」とのことであった。イタチの放逐は担当職員が知り得るかぎり「昭和47年よりずっと以前に行われた」とのことであった。また、みどり推進課職員の話では「マツ枯れ対策として昭和52年から56年に伐採焼却が行われた」とのことである。また、「平成6年にイノシシが13頭逃げ、そのうち6頭は駆除されたが増えている」とのことである。「昭和60年頃にイタチの増加が目立ち、サトウキビへの被害もでている」ようである。「昔はヘビが多く